法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

レーニンのアメリカ農業分析の方法と統計利用 ： 『農業における資本主義の発展法則についての新資料』について

KITA, Katsumi / 喜多, 克己

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
43
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
31
(終了ページ / End Page)
77
(発行年 / Year)
1975-07-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008358

レーニンのアメリカ農業分析の方法と統計利用

——『農業における資本主義の発展法則についての新資料』について——

喜多克己

目次

一　はじめに
二　レーニンのアメリカ農業研究の方法をめぐる若干の評価について
三　一般的命題から歴史的現実の理論的把握への上向
　1　資本主義のもとでの農業進化の一般的命題
　2　アメリカ農業の資本主義的進化における本質的特殊性
　3　統計資料の整理・加工・利用
　4　歴史的現実の理論的把握
四　理論的結論と統計資料との対置
　1　統計資料の整理と再構成
　2　地方的特殊性の分析を媒介とした対置

一　はじめに

レーニンの労作『農業における資本主義の発展法則についての新資料。第一分冊アメリカ合衆国における資本主義と農業』（以下『新資料』とよぶ）は、二〇世紀初頭におけるアメリカ農業の歴史的・具体的な事情を分析することによって、アメリカ農業における資本主義的進化の特殊歴史的本質の理論的認識を帰納するという叙述様式をもってわれわれの前に与えられている。

そこで、レーニンの、この「実証的経済研究」を分析することによって、現状分析の研究過程での方法、すなわち、一般的命題から現在のその当の歴史的・具体的事実の理論的把握に到達するためのすじ道をとり出し、さらに、そのような理論の実証的展開の過程において、レーニンが統計利用にどのような位置と役割とを与えていたかをたしかめてみようと思う。これが本稿の課題である。

『新資料』は一九一五年に書きあげられた。彼がこの著作において利用した統計資料は一九〇〇年（第一二回）および一九一〇年（第一三回）の合衆国センサスであるが、一部の資料は一九一一年の合衆国統計要録（Statistical Abstract of the United States, Washington, G. P. O., 1912）からとられている。

注一　レーニンは一九一二年パリで一九〇〇年の第一二回合衆国センサスの研究を手がけはじめ、一九一五年一ぱいかかって、この著作を完成した（一九一四年二月　クラコフからのイ・ア・グールヴィチ宛の手紙による）[1]

二　レーニンは将来、第二分冊としてドイツ篇をまとめる意向をもっていたが、これは実現しなかった（一九一六年一月ベルンからのア・エム・ゴーリキー宛の手紙による）[2]

レーニンはこの研究において「アメリカ農業における資本主義の姿を全体として描き出すこと」（『新資料』「レー

ニン全集」第二二巻、大月版六頁。以下引用文あとの数字は同書による頁数を示す）によって各種の特殊性の把握にもとづく「農業進化の形態と法則との研究」（五）を行ない、二〇世紀初頭におけるアメリカ農業の資本主義的進化の特殊、歴史的本質を理論的に認識することを目的とした。そして同時に、農業の資本主義的進化にかんする一般的命題を二〇世紀初頭のアメリカ農業の具体的事実によって実証しようとしたのである。

注　本書出版のために原稿を送ると同時に書き添えた手紙のなかでレーニンは「アメリカにかんする新資料は、できるだけ平易に叙述しようとつとめました。それは私の確信では、マルクス主義を平易にするためにも、それを事実で基礎づけるためにも、とくに役立つことでせう」と述べている（一九一六年一月ベルンからの前掲の手紙による）[3]

レーニンがアメリカ農業の現状分析にとりくんだのは、アメリカが「最新の資本主義の先進国」（五）として「資本主義的農業がもっとも広範に発展し、もっとも多様な関係をもち、もっとも色合いと形態に富んでいる国」（一〇八）であるからというところにあったが、同時に、一〇年ごとのセンサスによって「世界のどの国にもないような精密で豊富な資料」（五）がえられたという便利さにもよっている。

しかし何よりも「アメリカ合衆国における資本主義と農業」にかんする新しい事実についての理論的認識をめざすかれの研究を推進させる動因となったものは「資本主義社会で農業が非資本主義的な進化をとげる」（六）という一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、国際労働運動のなかで無視しえない潮流となっていた「ドイツ社会民主党」内の「修正主義派」の主張がアメリカのセンサス資料にもとづいてあらためてくりかえされていたことにあった。このような事情を背景として、レーニンは「資本主義社会で農業が非資本主義的な進化をとげる」という理論を二〇世紀初頭のアメリカ農業の現実と対置させ、事実と統計とによって「アメリカ農業における資本主義のすがたを全体として描き」だし、そこでの新しい事実の理論的認識をとおして修正主義の「理論の論破」（六）をなしと

げることを意図したのである。このような意味において、この研究は、なによりも実践的課題を念頭においた理論闘争の性格をもつものであった。

注　レーニンが『新資料』のなかで直接に引用して批判を加えているのは一九一〇年の第一三回合衆国センサス資料にもとづいて資本主義のもとでの農業発展の非資本主義的な道をあらためてくりかえしたエヌ・ギンメルの雑誌論文（「最新の北アメリカ合衆国センサスの結果から」《ザヴェートイ》、ペテルブルグ、一九一三年第六号）[4]であるが、すでに、それより一〇年前の一九〇三年にドイツの著名な小農優越論者E・ダヴィッドは、アメリカ合衆国における農場の平均面積の縮小を示す統計資料にもとづいて、それは農業が資本主義とは別の方向に向うことを実証するものであるとしてつぎのように述べていた。「アメリカは農業の発展問題を批判するにあたっては非常に啓示多い国の一つである。……アメリカでは、我が国におけるが如き経営統計を欺瞞する種々の歴史的障碍（たとえば、ダヴィッドはドイツでは都市資本家の別荘用の奢侈用地の形成が統計に影響を及ぼし大経営を支持している、という指摘を同じ書物のなか〔一三頁〕で行っている……引用者）や発展を阻害する[5]ものがなく、すべてが自由に発展をとげることができる。しからば如何なる現象がおきたか？　もっとも信頼しうる農業統計によれば、一八五〇年より一八九〇年までの間に農場の平均面積はまる八二・二ヘクタールから五五・五ヘクタールに低下した。かくの如く、経営単位は自己経営の農家家族が耕作しうる大いさに向って縮小する傾向がある。……農業は別の方向に向う、即ち、巨大経営への集中ではなくして『農民的の自己経営者的経営への縮小』が合言葉である。これこそまことに教示深い事実であり、私の見解の正当性を実証するものであると思う。[5]」

「修正主義」の創始者とされるE・ベルンシュタインもアメリカ農業の進化の状態が、すでに、マルクスの理論とは相違しているとして一八九九年に次のように述べていた。「農業についてこれをみるに、その経営の大小に関して吾人が今日ヨーロッパにおいて一般に、また、アメリカにおいてすらも一部に、目撃するところの形勢は、社会主義学説が従来仮定せしところのすべてと明らかに背馳するものである。工業ならびに商業においては大経営への上進運動が予想よりも緩慢に行われているにすぎないけれども、さらに、農業に至っては経営規模の静止を示しているか、あるいは反対に、その縮小を示している[6]」（傍点原文）

『新資料』において、レーニンはまず、合衆国では「小規模な勤労的農業がその支配圏をひろげつつある」（五）

という修正派の主張に根拠を与えることになっている「新しい現象」として、一九世紀末から二〇世紀初頭の時期にかけて合衆国の農場の平均面積が縮小傾向をとっていることを示す事実資料に注目する。

レーニンは、このような一見したところ資本主義のもとでの農業進化の一般的方向、あるいは、それまでの農民層分解の概念と矛盾するかにみえる具体的事実にかんする知識を提起し、これをいかに理解すべきかを問うのである。

そのためにレーニンのとった基本的な方法は、大筋的に言えば、著しい多様性をもってあらわれている二〇世紀初頭のアメリカ農業の歴史的、具体的全体を、一定の理論的見地にもとづき分析的に解体して本質的な現象・側面を明るみにだし、これを資本主義における農業進化の一般的命題の特殊条件のもとでの現象形態としてとらえることによって提起された事実の理解に到達しようとする方法である。そして、それが同時に、事実によって一般的命題を証明してゆく過程ともなっているというものである。

以下、私は、二〇世紀初頭のアメリカ農業の現実の発展傾向を全面的に分析した『新資料』にもとづいて、そこに展開されている歴史的・具体的事実の理解に到達してゆくための基本的すじ道をとりだし、さらに、その展開過程のどの段階において統計による認識がいかに位置づけられているかという統計利用の基本課題を明らかにしたいと思う。

しかし、そのまえに、レーニンのアメリカ農業研究の方法をめぐる若干の評価にふれておくことがぜひ必要であろう。

（1）『レーニン全集』第三六巻、邦訳三〇〇頁

（2）同『全集』第三五巻、邦訳二一八頁

(3) 同書、同頁
(4) С. Н. Гиммер, Из итогов последнего ценза С.-А. Соединенных Штатов (Заветы, Спб., 1913, № 6)
(5) E. David, Sozialismus und Landwirtschaft, 1903.
森力訳『社会主義と農業』五一頁、(本書は同名の大著そのものではなく、大著出版の年に行われた、それの要約的講演であって雑誌 Deutsche Worte に掲載され、さらに別刷として配布されたものである。彼の言わんとするところはこの小冊子に圧縮し尽されている)
(6) E. Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, 1899. 金原賢之助訳『マルキシズム批判』一五八頁(原題「社会主義の諸前提と社会民主党の任務」)

二　レーニンのアメリカ農業研究の方法をめぐる若干の評価について

すでに述べたように、レーニンは一九〇〇年および一九一〇年の合衆国センサス結果を材料として利用することによって、資本主義一般の発展の法則性が二〇世紀初頭の時期のアメリカ農業において、どのような特殊性をとおして、すなわち、どのような特殊な形態をとってあらわれているかを全面的に分析している。(1)

しかし、レーニンの、このアメリカ農業研究は、資本主義的独占体の出現・成立という二〇世紀初頭の時期の材料のうえにきずかれているにも拘らず、その理論的結論では独占資本主義と結びついた諸モメントは農業の進化にとって本質的な特殊条件をなすものとして前提されていない。それは何故であろうか。

モスクワ大学のツァゴロフはさいきんこの点に関して、それは、レーニンの農業問題研究の視角から規定される方法論的必然性によって捨象されたのだとする見解を述べている。すなわち「農業問題にあてられ、ロシア、西ヨーロッパ、アメリカを分析対象としたレーニンの多数の研究」において、レーニンは「上記の国々の農業の研究と

いう課題を提起しなかった。かれは、マルクスが独占以前の資本主義の研究にもとづいて資本主義一般の法則として定式化した諸法則が農業に及んでいるかどうかという経済学的課題の視角からこの対象を研究したのであった。この理論的課題が材料の収集と分析をあらかじめ規定した。この課題のためには、独占資本主義と結びついた諸モメントは本質的なものではなく、捨象されるべきものであったのである」(2)（傍点原文）というのである。

まず、この見解の前段の部分について言えば、レーニンは『新資料』において「合衆国センサス」の材料を利用して、二〇世紀初頭の時期の「アメリカ農業における資本主義の姿を全体として描き」(六)だし、その現実の発展傾向を全面的に分析したのである。

すなわち「具体的な、そして、歴史的に特殊な現実の分析」(3)にもとづいて「国民経済のこの部門では資本主義がどのような特殊な形態をとって現れているかという事情」の「詳しい検討」(三〇、傍点原文）をとおしてアメリカ農業における資本主義一般の発展の法則性をつかみ出しているのである。

一定の時期における特定の資本主義国の事実の分析は、それを資本主義一般の発展法則に還元することだけにつきるものではなく、具体的・歴史的諸条件の分析によってその特殊な形態を解明するものでなければならない。

さいきん、テ・ヴェ・リャブウシキンはレーニンの統計資料分析の基本原則を総括した論文のなかで、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』にふれて「レーニンの課題はロシアの具体的・歴史的諸条件のもとでの資本主義発達の一般的特徴とともに固有の過程をなしたところの、その形態と特質、その特有な合法則性を解明するところにあった」(4)と述べているが、この趣旨は『新資料』におけるアメリカ農業分析の課題にかんしても全く妥当する。

注　上杉正一郎氏もかつて「経済研究における統計の意義」を論じて「歴史的・具体的現実の分析」における「統計の利用」

は「一定の時期における一定の国の特殊性を、量的な表現をとおしてとらえる」ものであるとともに「一般性」を「数量的な把握をとおして確証」するところにあるとして、このような具体的・歴史的問題の研究の例としてレーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』と『新資料』とについて述べている。(5)

レーニンはアメリカ農業の各種の特殊性をとらえるとともに、その特殊性のなかにそれを媒介として一般性があらわれていることを明らかにしたのである。

したがってツァゴロフの言うように、レーニンはアメリカ合衆国の農業の研究という課題を提起しなかったとするのは一面的であると言わねばならない。

あきらかにレーニンは、農業の資本主義的進化の一般的命題を二〇世紀初頭のアメリカ農業の具体的・歴史的現象分析と同一の現実接近の次元にまで上向させているのである。(6)

さらにツァゴロフの後段の見解はどうであろうか。

たしかに、レーニンは農民改革後の時代におけるロシアの農民層分解の研究において、農民層の資本主義的分解をはばんでいる諸要因、すなわち債務奴隷制、高利貸業、雇役などの農奴制的搾取方法の遺物を捨象するのは「まったく当然の方法」であるとして「なぜなら、そうしなければ、農民のあいだでの経済関係の内部的構造を研究することはできないからである」(7)と述べている。

ツァゴロフが「レーニンは……封建制の残存物の解消度によって規定される具体的形態にかかわりなしに、農業における資本主義の発展一般を表現する側面」を研究したと指摘しているのは前述のレーニンの方法を指しているものとみてよいであろう。

しかし、これと同じ論法で「レーニンの研究の大きな部分は独占資本主義時代の資料にもとづいているとはい

え」「独占資本主義と結びついた諸モメントは本質的なものではなく、捨象されるべきものであった」[8]とは言えないであろう。

資本主義のもとでの農業の進化の研究において封建遺制などの不純物と資本主義の発展の帰結たる独占資本主義と結びついた諸モメントとを同じように扱いうると考えるのは誤りであろう。

そうではなくて、『新資料』のように、二〇世紀初頭における「最新の資本主義の先進国」（五）で「資本主義の発展が急速」（同）な「その国のすでに達成した資本主義の発展が最高度のものである」（同）ところの「合衆国の実例」（一一九）によって「資本主義のもとでの農業の進化にかんして正確な事実にもとづく結論」（一〇八）をひきだそうとする歴史的現実分析において、資本主義それ自身の発展によって必然的につくり出された資本主義的独占体の支配にもとづく作用――独占資本主義の蓄積メカニズムにもとづく作用力――の深化は「資本主義の影響のもとにおける農業の進化」（六六）にとって捨象しえない本質的な特殊条件をなすものであるとしなければならない。

だからといって、もちろん、ここでひき出されるべき結論は、資本主義のもとでの農業進化の一般的命題を基礎とせず、それの具体化ではなしに、それとは別個に、たとえば〈独占段階における資本主義的生産関係の後退化傾向〉というような〈独占資本段階の農業理論〉を与えるということではない。

そうではなくて、独占段階の新しい農業現象も資本主義のもとでの農業進化の一般的方向を基礎として、その一つの特殊的形態としてとらえられねばならない。しかし、そのさい、独占資本主義の提起する諸条件――農工間の不均等発展の一そうの深化、工産物の独占的高価格と農産物の低価格形成、金融資本への農業および農民の従属、相対的過剰人口の恒常化による「構成的失業」の形成など――は本質的特殊条件として、農業進化の現象形態に新しい特殊的本質規定を加重することになると言わねばならないのである。

それにも拘らず『新資料』の理論的結論では独占資本主義と結びついた諸モメントは本質的な特殊条件をなすものとしては前提されていないのである。

それは当時のレーニンの表象において、広大な西部の自由地の存在とそこえの急速な拡張という一九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカの特殊歴史的事情[9][10]が独占資本主義成立の初期段階での、これにもとづく農業の進化・発展に対する阻止的・歪曲的作用力の顕現を部分的にとどめ、全体としては減殺しえているものとして現われていたからであると言ってよかろう。

注　それにも拘らず、ここで注意しておかねばならないことは一八七〇年以降世紀末に至るアメリカ資本主義の独占形成期において「鉄道、金融、農産物価格、土地保有の問題」を主要運動目標にかかげた反独占農民運動（ポピュリスト運動）が全国的規模で展開してくるような現実の社会経済的条件がすでに存在していたということである。

この間の事情に関してはとりあえず次を参照。

田島恵児：独占形成期アメリカ農業に関する若干の考察――ポピュリズムの経済的前提（土地制度史学第二九号、一九六五年一〇月）、中西弘次：一九世紀後半における農業生産＝流通の展開――国内市場の成立をめぐって（都留、本田、宮野編「アメリカ資本主義の成立と展開」一九七四年、所収）、川崎七瀬：ミネソタにおける小麦市場の発展と農民運動（土地制度史学第二八号、一九六五年七月）

レーニンのつぎの叙述はそれを示唆している。すなわち、レーニンは、当時のアメリカ農業において農場の三割以上が抵当にいれられている事実に注目し、これが「金融資本への農業者の従属」（九九）の一面の反映であり、そのような農場の増加は「農場にたいする権力が事実上資本の手にうつることを意味する」（同）ことに注意を喚起している。

そしてさらに「抵当に入れられた農場のパーセントは国のすべての地方でたゆみなく増大している」（九七）が、

このパーセントは「工業的な資本主義的北部で最大である」(同) ことを指摘したうえ「まだ占取されていない自由な土地が現存するという」「合衆国の特殊性」が「すでにひらけたもっとも工業的な諸地方で進行している小農耕者の収奪の過程を蔽いかくすものとなっている」(九二、傍点原文) としている。

したがって、このようにみてくるならば、また、レーニンの分析をもって「一般的命題には直接合致しない帝国主義段階の特殊現象にことさら目をつぶることによって、一般的命題に固執していたにすぎない」(大内力「アメリカ農業論」一九六五年、二五九頁) と言いきるのも妥当ではなかろう。

注　もっとも大内氏の、このレーニン批判は、直接的には一九世紀末のヨーロッパ農業に対するレーニンの理解に対して向けられたものであって「一九一〇年代においても一九世紀末のヨーロッパ農業よりはなお若々しい様相をもっていた」(大内、前掲書二六〇頁) アメリカ農業を対象とするかぎりは「ヨーロッパ農業の現実認識については弱点をばくろしたレーニンの理解の不十分さもそれほど欠陥をしめさなかった」(同頁) としている。しかし「かりにそうだとしても、もし、レーニンが正しく帝国主義段階における農業の発展傾向を見とおしていたとするならば、一九一〇年代のアメリカ農業を分析するにしても、その分析視角はまったく異っていたにちがいない。たとえば農民的経営をとりあげるにしても、それをなお残っているものとしてではなく、むしろますます増加しつつあるものとして把握したであろうし、資本家的経営を逆になお残っているものとして把握したにちがいない」(同頁、傍点原文) と、レーニンのアメリカ農業分析を批判している。

しかし、資本主義のもとでの農業進化の一般的命題からはなれて「帝国主義段階の特殊現象」の理論を与えようとする方法はわれわれを納得させえない。なお、その後、大内氏の見解の線をさらにすすめて、レーニンのアメリカ農業分析は「農業における資本主義の発展を検出しようと急ぎすぎたため、やや無理な結論に陥っている点が多い」として、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのアメリカ農業の資本主義的発展それじたいに対する否定的評価を導き出し「アメリカ農業も世界的中農化時代の例外」ではなかったと結論づける論者もでている。(11)

現象が一般的命題に直接に合致しないのは言うまでもない。問題は、もちろん、この乖離がいかに大きかろうと

両者の媒介された複雑な相関をいかに考えるべきかというところにある。

特殊現象を特殊現象として一般的本質からきりはなしてしまうのではなしに、なによりも現象の分析と一般的命題の具体的展開とによって、それを複雑な屈折を経た一般的命題の特殊現象としていかに把握するかという困難な道をすすむ以外にはない。

あとでさらにレーニンのアメリカ農業分析に則して具体的にとりあげることになるが、ここで歴史的具体的事実を理論的に把握する現状分析において特殊性を解明するということの意味にふれておきたい。

われわれはまず特殊性というものを資本主義発展の一般的法則性が具体的歴史的条件のもとでとる特殊な形態として問題にする。

そこでは一般的命題は、より多くの規定性の付加された領域において、それら特有の条件によって屈折され歪曲と変容をうけながら顕現する。特殊性の解明とは、一般的に言って、このような意味において、一般的命題にもとづいて特殊具体的な顕現の諸形態と諸条件とを明らかにすることであると言えよう。そのさい、本質的特殊性と呼ぶべきものは現象形態に本質的規定性を加重することになるものであって、現実の具体的経済過程を理論的に（具体的概念の連関体系として）再構成するさいに、一般的本質規定と総合される特殊的本質規定をなすものである。したがってこれは、こうした必然的な現象形態をとる本質的特殊条件として現象を説明する理論成立の前提条件をなすものである。

これに対して本質的でない特殊性とは現実の具体的経済過程を理論的に再構成する過程において捨象されるべき副次的特殊性である。

これは現象の発現形態にまで具体化された理論（上向展開された理論的結論）を方法理論とすることによって個別

的現実の現象の経過を説明するさいにおいて再び個々の現実の現象形態を偏倚させるものとして現われるものではあるが、現象形態に本質的規定性を付加しないものである。

このような特殊性をもたらす条件は認識目的との関連においては副次的であり、理論成立の前提条件としては捨象しうるものである。

このように考えるならば、資本主義のもとでの具体的・歴史的な農業進化の現象の理論的認識において、独占資本主義の提起する新しい歴史的条件は現象形態に新しい特殊的本質規定を加重するところの捨象しえない本質的特殊条件をなすと言わねばならない。

しかし『新資料』は、すでに述べたように独占資本主義時代の資料に基礎をおくにもかかわらず、対象の理論的認識において、独占資本主義と結びついた諸モメントを特殊的本質規定を付加するものとしては含んでいないのである。

すなわち、二〇世紀初頭のアメリカ農業の具体的・歴史的現象分析と同一の現実接近の次元にまで上向しているにも拘らず独占資本主義の提起する基本的条件を、農業の資本主義的進化の現象形態に新しい特殊的本質規定を加重するものとして十分に総括しえていないのである。

この点において『新資料』の理論的認識にはなお究明されるべき問題が含まれているとしなければならない。

(1)　レーニンのアメリカ農業分析の結論が今日――農業にたいする独占資本の全面的支配のもとで、いかなる点においていぜん妥当し、また、いかなる点で変化が生じているかについては、とりあえず、二見昭「現代アメリカ農業の構造」一九六五年を参照のこと。

(2)　ツァゴロフ、キーロフ共編「資本論と現代資本主義の諸問題」一九六八年、宇高基輔訳、九～一〇頁

(3)　レーニン「非批判的批判」『全集』第三巻、邦訳六四七頁

(4) В. И. Ленин и современная статистика, второй том, развитие теории и методологии статистики в трудах В. И. Ленина, 1971, стр, 13.

(5) 上杉正一郎「経済学と統計」(改訂新版) 一九七四年、一一一～一一五頁

(6) レーニンは当初、本書の表題を「アメリカ合衆国における資本主義と農業」とし副題として「農業における資本主義の発展法則にかんする新資料」とする案をもっていた(「農業問題ノート」『全集』第四〇巻、邦訳三八〇頁)

(7) レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」『全集』第三巻、邦訳一七八頁

(8) ツァゴロフ、キーロフ共編、前掲書、九―一〇頁

(9) フロンティア・ライン(開拓線)の公式的消滅は一八九〇年頃(一八九〇年センサスにおける「連続したフロンティア・ラインの消滅確認」)とされているが、それは「ただちに農業生産地域の拡大の停止を意味するものではない。……フロンティアの存在ということの農業発展への影響は、二〇世紀に入ってもつづき、それが完全に終了するのは一九一〇年代においてである」(鈴木圭介編「アメリカ経済史」一九七二年、四〇七頁)

なお、同様の指摘について、大内力「アメリカ農業論」一九六四年、六三、七七頁参照。

(10) 一八九〇年から二〇世紀初頭にかけての農業生産の地域的変化(西方への発展)の概観については Harold U. Faulkner, The Decline of Laissez Faire, 1897—1917 (Vol. VII, The Economic History of the U. S.), 1951, pp. 327—330. 参照。フォークナーは同書で「フロンティアは公式的には一八九〇年に終了したとは云え農業の西方への発展はひきつづいていた」(三二七頁)としてその間の事情を述べている。

(11) 馬場宏二「アメリカ農業問題の発生」一九六九年、一六八頁。また、同様の立場に立つ論考として、宮川淳「二〇世紀初頭におけるアメリカ農業の階級構造(1)(2)」(「オイコノミカ」第二巻、第三・四号、一九六六年、第四巻第一・二号、一九六七年)がある

三　一般的命題から歴史的現実の理論的把握への上向

1　資本主義のもとでの農業進化の一般的命題

レーニンは資本主義のもとでの農業進化の一般的命題をどのように定式化しているであろうか、また、そのさいの理論の次元および前提条件をいかに規定しているであろうか。この点からみてゆくことにしよう。

レーニンは一般的命題を「資本主義の基本的で主要な傾向は、工業でも農業でも大規模生産が小規模生産を駆逐することにある」(七二) と述べている。そして同時に「大規模生産による小規模生産の駆逐という法則は、商業的農業について言うことができるにすぎない」(六六、傍点原文) と、その作用範囲の歴史的条件を明確にしている。

これは、この一般的命題が対象的実在についての正しい判断でありうるための歴史的および論理的前提を示したものと言ってよい。

すなわち、駆逐とは市場めあての農業生産を営む経営についての商品経済の法則(一個の市場価値のもとでの個別的生産費の相違)の作用にもとづく階層分化・分解の進行過程の反映にほかならないのである。

しかし、このような駆逐の過程は一気に進むものではない。レーニンは、この駆逐ということがそれほど単純ですっきりしたかたちでとらえられるものではないことに注意して、つぎのように述べている。

すなわち「この駆逐を、即時の収奪という意味にのみ理解してはならない。数年にも数十年にもわたりうる、小農耕者の零落、彼らの経営条件の悪化もこの駆逐のうちにはいる。そしてこの悪化は、小農耕者の過度労働、あるいは悪化した食事のうちにも、借金の重荷のうちにも、家畜の飼料と飼育一般の悪化のうちにも、土地の管理、耕作、施肥、等々の諸条件の悪化のうちにも、経営技術の停滞その他のうちにも、現れる」(七三、傍点原文) と。

これは階層分化分解のふだんの進行にもかかわらず、小商品生産農民の大多数は零落したままたえず都市プロレタリアートまたは非農業的人口に移行しようとしてきわめて長期間にわたって広汎に残留（潜在的過剰人口の形成）するものであることを指摘したものである。

このように、レーニンは、小規模生産は大規模生産にただちにその席を譲らなければならないものとは考えていなかったのである（したがって後述するように「駆逐」の現実を具体的、数量的にとらえるさいにおいて「駆逐」概念の統計指標概念への転化はさほど単純なものではないということになるし、また、所与の「駆逐」指標の利用にさいし指標性の解明が必要となる所以である）。

以上の一般的命題は「資本主義との関連における、資本主義の影響のもとにおける農業の進化」（六六）の基本的な傾向を定式化したものにほかならない。そこからもすぐに明らかであるように、ここでの理論次元においては、資本主義経済がすでに社会の主要な生産関係になっていること、工業を中心とする一般産業ではすでに資本主義的生産様式が一般的支配的であること、そして農業では資本主義的農業と小農的農業とが併存していること、これらが前提とされていると言うことができる。

したがって、また、そこでは「資本主義一般にとって特徴的な農業と工業との発展の不均衡」[1] すなわち「すべての資本主義国に固有の現象」（一〇一、傍点原文）であるとされる農業の工業にたいする資本主義的発達のおくれが不可避的なのである。

資本主義のもとでの農業の工業に対する発展のたちおくれは、生産財生産部門にたいする消費財生産部門のたちおくれという資本蓄積の一般法則の一環をなすものであるとともに、土地所有＝地代の圧力および土地保有の独占が農業への資本投下の障害をつくりだすところに基礎をおいている。

レーニンが指摘しているような経営諸条件の悪化した状態のままでの長期間にわたる小農耕者の広汎な残留ということじたいが資本主義のもとでの農業部門の不均等的たちおくれの反映にほかならない。

かくてレーニンは農業における資本の運動法則を二重に進行するものとしてとらえていたとみられるのである。すなわち、資本主義のもとでの農業の発展は、工業の発展に不均等的にたちおくれるのに、工業でも農業でも大規模生産が小規模生産を駆逐するのが基本的な傾向である、ということである。

ではレーニンは、この資本主義のもとでの農業進化の一般的命題から、どのようにして歴史的現実、すなわち二〇世紀初頭のアメリカ農業の当の事実の理論的把握にまですすむのであろうか。

2　アメリカ農業の資本主義的進化における本質的特殊性

レーニンは〈資本主義の基本的で主要な傾向は工業でも農業でも大規模生産が小規模生産を駆逐することにある〉という一般的命題から、二〇世紀初頭のアメリカ農業の歴史的現実の理論的把握にまで上向してゆくのであるが、それには、そのために必要ないくつかの本質的特殊性を抽象的なものからより具体的なものへと分析してゆくことを媒介としている。

レーニンは直接的な現象を規定する具体的・歴史的諸条件の理論的考察にもとづいて、アメリカ農業の資本主義的進化の本質的特殊性――現実の具体的経済過程を理論的に把握するために付加されるべき本質的諸規定――をひき出している。

そして、農業の資本主義的進化の一般的命題を基礎におきながら、これらの特殊性の分析を媒介として、二〇世紀初頭のアメリカ農業の歴史的現実の理論的把握にまで上向してゆくのである。

まず、レーニンのひきだした本質的特殊性としての農業の特殊性の一つは、土地にたいする資本充用度の不等性

が農業における資本主義発展の多様な過程をうみ出しているということであり、より具体的な他の一つは、農業の集約性の高度化と経営土地面積の縮小との相関的動きというある国、ある時期の農業の具体的技術的条件にかかわる特殊性である。

ところで周知のとおり農業の特殊性をもっとも強調したのは「修正主義者」である。

と言うより、資本主義のもとで「農業は別の方向に向う」[2]という彼らの主張は、農業の独自性＝「農業的生産と工業的生産との間の本質的差異」[3]という認識を基礎として成り立っている。彼らは、農業の特殊性成立の根拠を、農業の有機的生産、自然の制約性、季節的生産等々におき、これらにもとづいて、資本主義社会において農業が非資本主義的進化をとげるという結論をひきだしたのである。

すなわち、資本主義のもとで農業が別の方向に向うところに農業特有の条件をみていたのである。そして、その例証として、土地面積別分類において下級の群ほど集約性が高いことをあげて、そこに小規模生産の優越性や生活能力などをみたのである。[4]

要するに彼らは農業の特殊性を一般的法則の特殊な顕現形態を規定するものとしてではなく、一般的法則の作用を拒否するところにみたのである。

これに対して、レーニンの見解は「農業における資本主義の発展過程は、はかりしれないほど複雑で、工業とくらべて比較にならないほど種々様々な形態をとる」[5]にせよ、農業の特殊性とは、農業における資本主義発展の特殊性にかんするものである。

すなわち、土地が基本的生産手段をなす農業においても資本主義が成長するという過程は基本的に同一であるが、そこでは、土地の質と位置の相異によってばかりでなく、土地に充用される資本投下の大きさの相違によって資本

主義的発展の諸条件、諸形態の多様性が生みだされる。そこに農業の特殊性をみるのである。

注　レーニンがここで、マルクスの地代分析（差額地代Ⅱ）のなかでの指摘、「形態Ⅱの差額地代では、豊度の相違のほかに、借地農業者たちのあいだの資本（および信用能力）の配分の相違が加わってくる」[6]こと、そして「一エーカー当たりで計算した地代（超過利潤……引用者）の高は……土地に投下された資本の増加の結果として、増大する」[7]を念頭においていることは明らかである。

したがって、この特殊性にもとづいて小土地面積の農場が土地に投下されている資本の量からいって大規模生産になりうるのである。

さらに、つぎにレーニンのひき出している「現代農業の技術そのものに関係のある条件」（七五）にもとづく特殊性とは、「農業の一定の条件のものでの技術の具体的な高さ」（同）あるいは「ある経営方式にとって必要な資本の具体的な額」（同）という諸条件に依存するところの特殊性である。これは「農業の集約性を高めるために経営土地面積の規模をへらすことを要求するような条件」（同）をもたらす「農業の技術的特殊性」（三二）である。

したがって、この特殊性は「ある国に、ある時期に、どんな条件が現存するか」（七五）にかかわるものであって、「一般的な理論的考察も、実例も、この問題に解答をあたえることはできない」（同）ものであるが、これが統計資料の分析によって解明されるならば「集約化の過程は、経営内の平均耕地面積は減少しているのに経営の規模は増大し、生産と資本主義とは成長する」（三二、傍点原文）ことになりうるのである。

レーニンはこのように農業の資本主義的進化の一般的命題にとどまっているのではなく、現実の具体的経済過程を規定する歴史的諸条件に照して本質的特殊性をひき出し、アメリカ農業の歴史的現実把握のための理論的基準を定めてゆくのである。

しかし理論の具体的展開のためには現実の具体的経済過程を規定する特殊な歴史的条件が実証的に分析されねばならない。ここにおいて「特殊の歴史的材料」[8]としての統計の利用が不可欠の役割を演ずるのである。

3　統計資料の整理・加工・利用

レーニンは、すでに述べた資本主義のもとでの農業進化の一般的命題およびアメリカ農業の資本主義的進化における特殊歴史的規定性＝本質的特殊性の認識にもとづいて、事実を反映した統計資料を整理し加工し利用するのである。

すなわち、対象の一般的、特殊的な経済理論的認識を指導理論として統計材料を処理している。まさに「材料を処理する方法は対象の構造の論理からでてくる」[9]のである。

このことはレーニンが、アメリカ農業の資本主義的進化における本質的特殊性の考察につづけて「現代の農業調査のあつめた材料を分類する問題は、一見したところ、狭い技術的な、狭い専門的な問題のように見えるかもしれないが、しかしまったくそうではない」（六〇）と述べて、対象の本質と特殊性にかんする経済理論的認識にもとづいて「材料を意味あるように統計的に加工」（六一）する問題にとりかかっているところからも明らかである。

この点について、レーニンの別の著作（「ロシアにおける資本主義の発展」）においても同様に的確な問題の指摘がみられる。すなわち「機械制大工業の発展に関する問題を工場統計だけに帰着させるのは、おかしなことである。この問題は、統計の問題であるばかりではなく、ある国の工業における資本主義の発展が経過するもろもろの形態と段階にかんする問題である。これらの形態の本質やそれらの形態の特徴的な特殊性があきらかにされてはじめて、適当に加工された統計資料によってあれこれの形態の発展を説明することが、意味をもつのである」[10]

したがって、ここでの課題は対象の本質と特殊性にかんする経済理論的認識にもとづいて、不可分にいりくみ、

限りない多様性をもって現れている二〇世紀初頭のアメリカ農業の生きた現実の個々の現象・側面を反映した統計資料を処理して問題たる本質的現象・側面を明るみに出し、これを指標体系で表現すること、そして一定の規則性を導出することにある。

注　ついでにこの過程での統計資料の処理法について一般的に指摘しておくならば、それは、対象の構造の論理に導かれたつぎの諸操作、すなわち、分類標識と指標の選択、分類標識の組合せ、指標体系の作成、分類標識と指標体系の結合、指標体系の時系列の編成、統計的規則性の導出などを中心とすると言ってよいであろう。

ではアメリカ農業の資本主義的進化における特殊性の分析にあたりレーニンがどのように統計資料を処理しているかをみよう。

(イ)　土地にたいする資本充用度の不等性が農業における資本主義発展の多様な過程を生み出すという特殊性の分析

レーニンは、この「農業の特殊性」について農業経営を土地面積によってのみ分類することが農業進化の法則の研究にとっていかに不十分であるかを摘出しつつ解明している。したがって、ここでは同時に常套によって支配されている統計分類に対する科学的批判をとおして農業統計におけるグループ分け法の根本問題が提起されているのである。

まず、農場の土地面積別分類（Classification by area in acres）によって「一農場あたり」および「土地一エーカーあたり」について現代農業の進化の方向を反映する諸指標（賃労働支出、肥料代、農具と機械の価額など）をみると、これらの諸指標は「一農場あたり」では下級の群から上級の群へと上昇してあらわれるが、「土地一エーカーあたり」では逆に低下してあらわれている〔第一表〕。

〔第1表〕 土地面積および生産物価額による農場分類と集約性の指標（1900年）

農場分類＼指標		1農場あたり（ドル）			土地1エーカーあたり（ドル）			
		耕地（エーカー）	賃労働支出	農具と機械の価額	賃労働支出	肥料代	全家畜の価額	農具と機械の価額
農場土地面積別	3エーカー未満	1.7	77	53	40.30	2.36	456.76	25.57
	3～10	5.6	18	42	2.95	0.60	16.32	6.71
	10～20	12.6	16	41	1.12	0.33	8.30	2.95
	20～50	26.2	18	54	0.55	0.20	5.21	1.65
	50～100	49.3	33	106	0.46	0.12	4.51	1.47
	100～175	83.2	60	155	0.45	0.07	4.09	1.14
	175～260	129.0	109	211	0.52	0.07	3.96	1.00
	260～500	191.4	166	263	0.48	0.04	3.61	0.77
	500～1,000	287.5	312	377	0.47	0.03	3.16	0.57
	1,000エーカー以上	520.0	1,059	1,222	0.25	0.02	2.15	0.29
生産物価額別	0ドル	33.4	24	54	0.08	0.01	2.97	0.19
	1～50	18.3	4	24	0.06	0.01	1.78	0.38
	50～100	20.0	4	28	0.08	0.03	2.01	0.48
	100～250	29.2	7	42	0.11	0.05	2.46	0.62
	250～500	48.2	18	78	0.19	0.07	3.00	0.82
	500～1,000	84.0	52	154	0.36	0.07	3.75	1.07
	1,000～2,500	150.5	158	283	0.67	0.08	4.63	1.21
	2,500ドル以上	322.3	786	781	0.72	0.06	3.98	0.72

注）第12回（1900年）合衆国センサスの資料からレーニンが編成した統計表にもとづいて作成した

注　農業進化の方向を反映する諸指標の選択にかんしてレーニンは次のように言う。

賃労働は「資本主義の発展のもっとも明白な、もっとも直接的な指標である」（四二）し、肥料、農具・機械は「農業の集約化の程度のもっとも正確な統計的表現として役立つ」（三六）。また、「われわれが経営の個々の要素のうちから農具と機械を選びだすのは、それらの要素は、どんな農業経営が行われているか、それはどのように経営されているか、集約の程度は大きいか小さいか、改善された技術が豊富に応用されているか、それともわずかしか応用されていないかを、直接にさししめすものだからである」（五四）と。

ここに本質的な現象・側面を反映する指標の選択基準は対象の一般的、特殊的な経済理論的認識によって与えられるものであることが明瞭に示されている。また、指標が羅列

的にではなく、それらが意味のある体系をなしうるための理論的基準についても同断である。

しかし同時に、指標の選択にかんれんして、経済理論的概念を指標概念へ転化するさいの独自の困難について、別のところで、つぎのように指摘していることをつけ加えておこう。

「大規模生産による小規模生産の駆逐という問題が複雑で錯雑しているのは、駆逐とは〈大企業の意義の増大と小企業の役割の縮小を意味するということを、だれかが理解できない（誠心誠意理解できない）からではまったくなく、ひとえに、駆逐、もしくは意義の増大または役割の縮小の、指標と標識をどうえらぶかについて、一致に達することが困難なためである」(11)（傍点原文）

これは「駆逐」の現実を具体的、数量的にとらえるために「駆逐」の概念を表象化し指標の概念に転化することの困難さを指摘したものである。(12)

したがって統計利用にさいして所与の「駆逐」指標の指標性の解明が要求されることになる。

すなわち、ある指標が「駆逐」の指標として選ばれたばあいそれがどのようないみで、また、過程のいかなる側面を反映しているのかを解明する必要があるということである。(13)

すなわち、「一農場あたり」でみれば大経営ほど資本主義的であることをしめしているのに、「土地一エーカーあたり」でみると、同じ資料は小経営ほどその集約性が高いばかりでなく単位面積あたりの賃労働支出額も高くなる。

この土地面積別分類のもたらす「矛盾の糸玉」（六五）を解くために、レーニンは「小経営と大経営とのいっそう正確な比較」（六六）をあらわす農場の生産物価額別分類（Classification by value of products）に目を向けるのである。

この分類により、同じく「一農場あたり」および「土地一エーカーあたり」で農業進化の方向を反映する諸指標をみると、「一農場あたり」では、さきの土地面積のばあいと同様の傾向がみられるが、「土地一エーカーあたり」では土地面積別分類のばあいとは全く逆に「農場の生産する生産物価額が大きくなるにつれて、農業の集約性は規

則的に高まっているのがみられる」(六九、傍点原文)。

このように土地面積別と生産物価額別の分類結果をくらべてみると「同一の材料が分類方法を異にすると正反対の矛盾した結論をあたえるのである」(同)

すなわち、経営規模を土地面積の大きさによって判断すると経営規模が大きくなるにつれて農業の集約性の指標は規則的に低下し、経営規模を生産物価額によって判断すると集約性の指標は規則的に高まるのである。

大経営と小経営との関係は、経営分類基準として土地面積の大きさをとるかあるいは生産物価額の大きさをとるかによって正反対の結果をもたらすことになる。

レーニンはここで、統計の整理・加工によってえられた一定の量的規則性に着目しつつ「この二つの結論のうちどちらが正しいか」を問い「いろいろの経営群を土地面積別に比較するばあいにえられる結論、すなわち、経営が大きくなるにつれて農業の集約性は減少するという結論は、無条件に誤っている」(七一)、そして「いろいろの経営を生産物価額別に比較するばあいにえられる結論、すなわち、経営規模が大きくなるにつれて農業の集約性は増大する、という結論」が「唯一の正しい結論」(同)であるとする。

しかしこのような現象形態の量的規則性にもとづいて一定の理論的結論がひきだされるためには、経営規模の概念、とりわけ同じ面積の土地へ追加資本が投下されるばあいの経営規模の概念についての理論的考察が必要である。具体的諸現象の統計的規則性が発見されたからと言って、もとよりただちに本質的認識が与えられたわけではないからである。

レーニンはつぎのように考察をすすめる。すなわち、農業の集約化＝土地単位面積あたり追加投資によって資本の蓄積が促進されるので集約化がより広範により急速に進展すればするほど土地面積の大きさは、土地に対する資

本充用度の不等性にもとづき経営規模についてなんら正確な観念を与えなくなること、これにひきかえ、生産物価額の大きさは経営規模＝生産規模を直接に表現すること、さらに農業の集約性の高まりと農業の資本主義的性格の増大とが内的関連をもって進行すること。

レーニンはこのように、導出された統計的規則性を社会科学の法則的認識過程のうちに組入れることによって資本主義のもとでの農業進化の方向についての本質的認識に到達しているのである。

さらにここでわれわれは、レーニンが統計的分類の方法を駆使することによって対象の多様にいりくんだ諸関連と諸側面から、一定の条件のもとで本質的かつ根本的な特徴（資本主義のもとでの農業進化の法則性のあらわれ）を取りだすという抽象と分析を行なっている点に注意を向けるべきである。

注　対象の構造の論理に導かれた統計分類の方法が多様にいりくんだ様々な要素と関連を区別し一定の条件のもとで本質的な特徴を分離する抽象と分析のための有力な手段をなすことは明らかであるが、これが一層効力を発揮するのは組合せ分類法の適用においてである。[14]

しかしその有効性は分類標識がただ組み合わせられているというだけでなく、それがさらに各グループの内容を特徴づけるための基本的な指標（体系）と結合されているのでなければ大きく減殺されるであろう。

たとえば合衆国の一九〇〇年センサス報告書（1900 Census, Vol. V, Part I）には土地面積別と農業生産額別（ibid., p. xlvii）、あるいは土地面積別と主要収入源別（ibid., p. xlvi）、さらに農業生産額別と主要収入源別（ibid., p. lv）などの各種の分類標識の組合せによる農場数分布の資料が与えられているにも拘らず、レーニンが「アメリカの統計のはなはだしい欠陥は、組み合わされた表がないことである」[15]と言っているのは、分類標識の組合せにもとづく各グループが基本的な指標によって特徴づけられていないことを指摘したものである。このレーニンの統計批判は今日のセンサスに対しても依然あてはまる。

(ロ) 農業の集約性の高度化と経営土地面積の縮小との相関という農業の具体的技術的条件にかかわる特殊性の分析

レーニンは「全問題はまさに、ある国に、ある時期に、どんな条件が現存するかというところにある」(七五) と言って、この特殊性の解明にこたえるものとして、農場の主要収入源別分類 (Classification by principal source of income) の材料を分析している。

注一　この分類は、さきの生産物価額別分類とともに第一二回 (一九〇〇年) センサスにおいてはじめてとりいれられたものである。これは各農場ごとに生産物価額の四〇%をこえる生産物ないし生産物群がある場合にはそれ (二つあれば首位のもの) をとり、四〇%をこえるものがないばあいには「雑」(miscellaneous) にいれるという方法で行われている。(1900 Census, op cit., p. xlii)

二　生産物価額別分類と主要収入源別分類について、レーニンは「新規なものであり、きわめて貴重でかつ教えられるところが多い」[16] と言っている。

センサスの原資料では農場が主要収入源によって一四の営農類型に分けられているが、レーニンはこれを経営の集約性と資本主義的性格をあらわす指標の検討にもとづいて三つのグループに総括する。(第2表)

すなわち、集約性と資本主義的性格の低いものとして畜産、綿花のグループ、中位のものとして乾草と穀物、雑のグループ、もっとも高いものとして野菜、果実、酪農品のグループである。

注　集約性と資本主義的性格のもっとも高いグループには、さらに、タバコ、米、砂糖、草花、温室作物、タロー芋、コーヒーもはいるが、これらは全部あわせても農場総数のわずか二・二%を占めるにすぎない。(1900 Census, op. cit., p. xlvi)

レーニンはこのような統計資料の整理、加工によって、経営の集約性と資本主義的性格のもっとも高いグループは、同時にまた、もっとも耕地面積の小さい農業によって構成されていることを明らかにしている。

〔第2表〕　主要収入源による農場分類と集約性の指標（1900年）

主要収入源別農場分類 ＼ 指標		農場総数に対する%	1農場あたり平均土地面積（エーカー） 総土地	耕地	総土地面積1エーカーあたり（ドル） 賃労働支出	肥料代	家畜の全価額	農具と機械の価額
低度に資本主義的	畜産	27.3	226.9	86.1	0.29	0.02	4.45	0.66
	綿花	18.7	83.6	42.5	0.30	0.14	2.11	0.53
中位	乾草と穀物	23.0	159.3	111.1	0.47	0.04	3.17	1.04
	雑	18.5	106.8	46.5	0.35	0.08	2.73	0.94
高度に資本主義的	野菜	2.7	65.1	33.8	1.62	0.59	3.74	2.12
	果実	1.4	74.8	41.6	2.46	0.30	3.35	2.34
	酪農品	6.2	121.9	63.2	0.86	0.09	5.58	1.66
全農場		100.0	146.6	72.3	0.43	0.07	3.66	0.90

注）前表に同じ

したがってたとえば、穀作経営から野菜経営への移行のかたちをとって現れている商業的農業の発展がもたらすものは経営の集約性と資本主義的性格の強化であるとともに、土地面積での規模の縮小ということになる。

「つまり、農業におけるいまの資本蓄積」と「今日の技術状態のもとでは、野菜生産のための経営は、乾草と穀物の生産のための経営よりも、小さな土地面積のうえに組織されなければならない」（七八、傍点原文）ということになる。

そしてこれに加えて、レーニンは「農場の土地面積がとくに小さく、賃労働の使用がとくに高く、労働生産性がとくに高いということを特色とする」ところの「これらの高度に資本主義的な、高度に集約的な作物や農場の役割」（八〇）がアメリカ農業において増大していることを一九〇〇年と一九一〇年の統計資料によって確認している。

以上にみてきたように、資本主義のもとでの農業進化の一般的命題をもとにしながら、(イ)(ロ)の特殊性の分析をとおして「面積は減少するのに土地への資本投下が増大する」（四二、傍点原文）という現実の表象は「生産規模の減少ではなく増大を、賃

労働の搾取の減少ではなく増大を意味する」（七九）ものとして、すなわち、「小さな地所での集約的な資本主義的大経営」（七四）の成長としてとらえられている。つまり農業の資本主義的進化の一般的命題との関連においてその意味が与えられることによって、現実の表象が概念に変えられたことになる。かくて「小規模生産は、経営土地面積の減少しつつある大規模生産によって駆逐される」（七九、傍点原文）ということになるのである。

4　歴史的現実の理論的把握

レーニンは、このように資本主義の農業への浸透形態に応じて統計材料の分類のやり方を変え、これに本質的現象・側面を反映する指標体系を結びつけることによって、具体的な場所と時間の限定された統計指標の体系をもって再現された事実の本質的現象・側面を農業の資本主義的進化の一般的命題の特殊条件のもとでの現象形態としてとらえている。

すなわち、これは対象の一般的・特殊的な経済理論的認識に導かれた統計資料の処理にもとづく特殊性の分析を媒介として、一般的命題からアメリカ農業の資本主義的進化の特殊歴史的本質の理論的把握にまで上向していることにほかならない。

ここでとりわけ、レーニンの、具体的歴史的条件の分析を媒介として進行してゆく上向の方法に注目するべきである。

つまり、「思惟が『上向』をなしうる前提的・裏面的な研究過程における手段・操作」すなわち「現実とその表象から出発する『下向方法』とそれがいかにからみ合っているか」[17]という点にとくに着目する必要がある。

このような分析と総合の過程をへて現実の具体的経済過程の特殊歴史的本質が理論的に把握されることになっている。

したがってこの過程での統計の利用は新しい理論形成のための認識材料としての利用であって、それは感性的認識の結果である統計資料が対象の一般的・特殊的な理論的認識過程のなかにくみこまれ利用されることによって理性的認識にまで高められたことであると言ってよい。

注　統計の役割を、抽象的論理的分析によって発展させられた法則、命題の検証という一面にのみ結びつけて位置づける見解がしばしばみられるが、このような見解は一面的なものと言わねばならない。したがって理論の発展における統計の役割に関してリャブウシキンが次のように述べているところには同意しうる。

「もちろん、以前に確立された法則あるいは合法則性の例解のために統計をしばしば利用する。しかし、もし統計の役割をこれのみに止めるならばどういう訳でレーニンが統計を社会認識のもっとも強力な手段の一つとして定義したのか理解しえないであろう」(18)

レーニンはこのような「上向」の結論として定立された命題の基本的側面をつぎのように定式化している。

「アメリカ農業全体について」「大規模生産による小規模生産の駆逐は、土地面積の点では〈大〉農場だが、より生産的でなく、より集約的でなく、より資本主義的でない農場が、土地面積の点では〈小〉農場だが、より生産的な、より資本主義的な農場によって駆逐される、というようにして行われる」(八一)

こうしてレーニンはアメリカ農業の資本主義的進化の特殊歴史的本質の基本的側面を把握していると言ってよい。

そこでなされたアメリカ農業統計の分析は二〇世紀初頭のアメリカ農業の特殊歴史性を具体的にとらえるものであった。しかし同時にレーニンは「農業の集約化と、それと関連する農場の平均土地面積の減少とは、偶然的な現象でも、地方的な現象でも、挿話的な現象でもなく、すべての文明国における一般的な現象」(四四、傍点原文)であるとして、そこに、農業における資本主義発展の法則性一般の表現をみているのである。したがって、レーニンの

アメリカ農業の特殊性の分析の結果は農業の資本主義的進化にかんする歴史的発展法則に組みいれられ、その内容を豊富にしたものであるということができよう。

すでにみてきたように、レーニンのアメリカ農業研究は対象の本質と特殊性にかんする理論的認識にもとづいて具体的歴史的事実（それを反映した統計資料＝歴史的材料）を分析し、そこから本質的現象・側面を分離（それを関連的指標体系で反映）し、これを一般的命題の特殊条件のもとにおける現象形態としてとらえることによって二〇世紀初頭のアメリカ農業の資本主義的進化における特殊歴史的本質の理論的把握に到達するという方法をとって進んできている。

したがってこの過程は同時に、基礎にある一般的命題の真理性を具体的事実によって検証してゆく過程ともなっているわけであるが、彼はさらに、この上向展開の結論を具体的経済過程を反映する事実資料と対置し、上向展開の結論を方法理論とすることによってあらためて経済過程の現実の経過を説明しうるものであることを示すのである。

（1）レーニン「資本主義の最高の段階として帝国主義」『全集』第二二巻、邦訳二三九頁
（2）E・ダヴィッド、前掲書五一頁
（3）同一七頁
（4）同三七頁
（5）レーニン「農業における資本主義」『全集』第四巻、邦訳一一六頁
（6）マルクス「資本論」第三巻（『マルクス・エンゲルス全集』第二五巻b、大月版八七一～二頁
（7）同八九一頁
（8）上杉、前掲書一〇二頁
（9）内海庫一郎「科学方法論の一般規定からみた社会統計方法論の基本的諸問題」一九六二年、三四六頁

(10) レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」『全集』第三巻、邦訳四七四頁
(11) レーニン「プレハーノフの第二次綱領草案にたいする意見」『全集』第六巻、邦訳二四頁
(12) 大橋隆憲、野村良樹「統計学総論上」一九六三年、二一頁
(13) 内海庫一郎「統計利用の独立な一研究段階としての統計の指標性の解明」(『統計学』第一九号、のち改稿のうえ同「社会統計学の基本問題」一九七四年、第三章第五節に収録)はこの点の必要性を強調している。
(14) 「レーニンは分類とりわけ組合せ分類において抽象と分析のための大きな可能性が与えられることを明示している」(И. Мали: В. И. Ленин о вопросах теории и методологии социально-экономичнских группировок, Вестник Статистики, №. 8, 1969; Statistische Praxis, 1970/3)
(15) レーニン「農業問題ノート」『全集』第四〇巻、邦訳三八七頁、傍線原文
(16) 同書、三八五頁
(17) 大橋、野村「前掲書」二六頁
(18) В. И. Ленин и современная статистика, первый том, теоретическое обоснование статистической науки в трудах В. И. Ленина, 1970, стр. 175 (「ヴェ・イ・レーニンと現代統計学」第一巻については『統計学』第二四号に岩井浩氏の批判的紹介がある)

四　理論的結論と統計資料との対置

1　統計資料の整理と再構成

レーニンは、〈大規模生産が小規模生産を駆逐する〉という資本主義の基本的で主要な傾向とアメリカ農業の本質的特殊性(土地にたいする資本充用度の不等性が農業における資本主義発展の多様な過程を生み出しているという特殊性および農業の集約性の高度化と経営土地面積の縮小との相関的動きという具体的・技術的条件にかかわる特殊性)とを総合して、現実の具体的経済過程における発現の現象的諸形態にまで具体化した理論的結論を当の事実の問題たる現象・側面

を明るみに出すように整理・再構成した統計資料と対置し、その結論が歴史的現実の過程とその発展法則を正しく反映しているかどうかをあらためて検証している。

したがってまずここでの課題は、現実の具体的経済過程の諸々の現象・側面を反映する統計資料の整理と再構成によって、理論的結論と対応するまさに問題たる所要の本質的現象・側面を反映するようなデータをいかにして創り出すかというところにある。

すなわち、この過程における統計利用の課題は、とりわけ、上向法の結論として定立された命題（現象の発現形態にまで具体化された法則）の基本的側面を事実（それを反映した統計資料）によって検証するところにおかれている。

そこでレーニンはまずセンサスによって与えられた全国を包括する統計資料を上向展開の理論体系を基準にして「模様がえ」する。

すなわち、センサスの与える三種類の農場分類（主要収入源別、土地面積別、生産物価額別）の分類基準を資本主義が農業に浸透する形態に応じて組替え、この三つの分類を直接に比較対照しうるように総括し、これを農業進化の方向と形態を示す指標の体系と結合しているのである。

もうすこし詳しくここでの材料処理法をみよう。レーニンはセンサスによって与えられた三種類の農場分類結果のそれぞれについて二次的分類（вторичная группировка）を行ない、それぞれを三つの群に再統括している。この二次的分類は資本主義が農業に浸透するのに対応して形成される経営の型および規模を反映するように分類標識の基準を組替えることによってさらに強い類型的性格をもったグループを分離するという観点からなされている。

すなわちまず、主要収入源別分類の三群（低度に資本主義的・中位・高度に資本主義的）への統括は、すでにまえに述べたように経営の集約性と資本主義的性格を反映した指標の検討にもとづいてなされている。

つぎに土地面積別分類の三群（小・中・大）への統括の基準は、ホームステッド（政府の土地付与基準は一六〇エーカー）の大多数を含む一〇〇～一七四エーカーを中、これを基軸として一七五エーカー以上を大（ここでは通例、賃労働なしにはやってゆけない）、一〇〇エーカー以下を小としている。

さいごに生産額別分類の三群（非資本主義的・中位・資本主義的）への統括は五〇〇ドル未満、五〇〇～一〇〇〇ドル、一〇〇〇ドル以上としているが、これも賃金支出の多寡を類型区分の基礎においている。

注　「一〇〇〇ドル以上の収入のある農場は資本主義的農場と認めることが必要、なぜなら賃金支出が多いから：一農場あたり一五八―七八六ドル。五〇〇ドル未満の収入のある農場は非資本主義的農場と認めることが必要、なぜなら賃金支出がとるにたりないから：一農場あたり一八ドル未満」（「農業問題ノート」『全集』第四〇巻、邦訳四〇五頁、傍線原文）

同一の材料にたいして適用された三つの異なった分類標識にもとづいて分離された各群の内容構成を直接に比較対照しうるようにするためには、それぞれ再統括された三群についてその内容を特徴づける諸指標の百分率（それぞれの指標にかんする分類体系ごとの各三群のシェア）をとることが必要である。

以上のような操作にもとづいてレーニンが作成した総括表を示しておくと〔第三表〕のとおりである。

レーニンはこのように、資本主義の農業への浸透に応じて形成される経営の型および規模を反映するように統計を再分類し、その分類標識に、各群の内容を農業進化の方向と形態の観点から特徴づける関連指標を結びつけ、上向方法による理論的結論の基本的側面に対応する、問題たる所要の現象・側面を明るみに出したデータを創り出しているのである。

そして理論的結論の基本的側面と統計とを対置する。そのポイントを要約すればつぎのとおりである。

(1)　「農場の生産物価額による分類」によって分離された資本主義的農場（一〇〇〇ドル以上の大規模生産）は全農

〔第3表〕 三つの農場分類の対比（1900年）

指標＼農場分類	主要収入源別分類			土地面積別分類			生産物価額別分類		
	低度に資本主義的	中位	高度に資本主義的	小	中	大	非資本主義的	中位	資本主義的
農場数	46.0	41.5	12.5	57.5	24.8	17.7	58.8	24.0	17.2
総土地面積	52.9	38.5	8.6	17.5	22.9	59.6	33.3	23.6	43.1
不変資本 農具と機械の価額	37.2	42.7	20.1	31.7	28.9	39.4	25.3	28.0	46.7
不変資本 肥料代	36.5	31.8	31.7	41.9	25.7	32.4	29.1	26.1	44.8
可変資本 賃労働支出	35.2	38.2	26.6	22.3	23.5	54.2	11.3	19.6	69.1
生産規模 生産物価額	45.0	39.0	16.0	33.5	27.3	39.2	22.1	25.6	52.3

注）1. 数字は総数にたいする%，それぞれの分類体系ごとに三つの群を合計すると100になる

2. 第12回（1900年）合衆国センサスの資料からレーニンが作成したもの

場数の一七・二%を占めるにすぎないのに生産物価額では全体の五二・三%（農場数シェアの三倍以上）を集中している。また賃労働支出も全体の六九・一%（農場数シェアの四倍）を占める。これを「農場の土地面積による分類」によって分離された大農場（一七五エーカー以上）とくらべると、大農場は農場数の割合（一七・七%）ではさきの生産物価額による大規模生産農場とほとんど変らないのに生産額の集中度でははるかに低い（三九・二%）。

これは土地面積での大農場のなかには「小さな地所での高度に資本主義的経営」が含まれていないためである。

(2) 一方、「農場の生産物価額による分類」によって分離された非資本主義的農場（五〇〇ドル以下の小規模生産）をみると、これらは農場総数の五八・八%を占めながら生産額では二二・一%を占めるにすぎない。また、機械装備、施肥の状態も平均より劣悪である（土地面積シェアにたいして農具・機械シェアおよび肥料シェアが下回る）。これは、この群には「小さな地所での高度に資本主義的な経営」がはいっていないためである。さらにこれを「農場の土地面積による分類」の小農場（一〇〇エーカ

ー以下）とくらべると、小農場は農場数の割合（五七・五％）では、さきの生産物価額による小規模生産農場とほとんど変らないのに生産額では三三・五％と高い。また、土地面積シェアではさきの小規模生産農場が三三・三％であるのに対して小農場は一七・五％と著しく低い。

しかし小農場は農業の集約性と賃労働支出では平均より高い（土地面積シェアを上回る）。これは土地面積での小農場のなかに「土地のすくない」もっとも「貧しい」小農場と「小さな地所での集約的な資本主義的大経営」が混在しているためである。

(3)　そこで「農場の主要収入源による分類」によって分離された「高度に資本主義的な農場」（野菜・果実・酪農品などの商業作物を主要な収入源とする農場）をみると、そこには、わずかな土地面積のもとでの高度に集約的かつ資本主義的性格の農場の存在が明示されている。これらの農場が「土地面積の分類」では小農場に混入するので小農場の状態が美化されて示されることになる。

レーニンはおよそ以上に述べたような統計表の「読み」（八二）を与えながら「農業の集約化の発展が広範で急速であればあるほど、また各経営のあいだで同一の単位面積に投下される資本量の差異がいちじるしくなればなるほど」（八八）土地面積による分類は「大規模生産の手への資本の集積と大規模生産による小規模生産の駆逐とを実際より過小にあらわす」（八六）こと、したがって「大経営における生産の集積は、土地面積の点でいろいろな規模の農場にかんする普通の資料のしめすところよりも、実際にはいっそうはげしく、小規模生産の駆逐も実際にはいっそう進行」（一一〇）していることを明らかにしている。

こうして「上向方法」の結論として定立された命題が、「アメリカの農業とその進化の全貌を全体としてしめ」すところのセンサスが与えた「三つの分類方法を全部いっしょにして比較し対照」（八二、傍点原文）した事実資料

による検証にたえうるものであることを確認しているのである。

2　地方的特殊性の分析を媒介とした対置

さらにレーニンは、上向展開の理論体系を方法理論として、さまざまの地方的特殊性（資本主義の農業浸透における各地方の特殊条件）の分析と結びつけることによって、それぞれの地方の個別的現実の歴史的経済過程を説明しうるものであることを示すのである。これは同時に農業における資本主義的進化の一般的命題を上向展開することによって到達した結論の基本的側面を、それぞれの地方の多様な個別的特殊性と総合することによって理論的結論が具体的歴史的事実をもって実証されることを示すことほかならない。

そのために、理論の、全国を包括する総括的資料との対置から、「特殊な条件を特色とする個々の地域」（四六）の特徴を反映した資料との対置へと進んでゆくのである。

ここではまず、いちじるしく多様な経営条件をもつ国内の各地を資本主義が農業に浸透する形態と段階に応じて特徴づけ、この地域区分にもとづいて地域別の農業進化の特殊条件が分析されねばならない。

すなわち「経済状態の点で本質的に別種の主要な地方を個々別々に考察することが無条件に必要となる」（七）のであって、農場の平均規模の減少という事実の理解にさいしても「農場の平均規模にかんする国全体についての資料はなんの役にもたたない」（四五）のである。

レーニンの直面した生きた具体的全体――一九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカにおいては、西部での開拓の進行とそこでの原始的な粗放的農業と畜産の展開がみられるとともに、はやくからひらけた工業的な東北部では集約的経営への移行がすすんでいた。

また南部では奴隷制プランテーションのクロッパー制プランテーションへの編成替と併行して奴隷制的巨大土地

〔第4表〕 三つの地方を特徴づける基本指標（1910年）

	工業的な北部	かつての奴隷制的な南部	植民されつつある西部	合衆国全体
① 工業生産額（10億ドル）	6.2	1.1	0.5	8.5
② 工業労働者数（100万人）	5.2	1.1	0.3	6.6
③ 総人口のうち黒人の割合（%）	1.8	29.7	0.7	10.7
④ 全農場のうち小作農の割合（%）	26.5	49.6	14.0	37.0
⑤ 小作農のうち分益小作の割合（%）	63.1	66.4	47.2	64.9
⑥ 総土地面積のうち耕地の割合（%）	49.0	27.0	5.0	25.0
⑦ 農場総面積に対する10年間(1901～10)のホームステッド届出面積の割合(%)	13.0	6.0	50.0	15.0
⑧ 農場数の増加率（1900～10）（%）	0.6	18.2	53.7	10.9
⑨ 人口増加率（1900～10）（%）	18.0	20.0	67.0	21.0
⑩ 農村人口の増加率（1900～10）（%）	3.9	14.8	49.7	11.2
⑪ 農場の土地1エーカーあたり農具と機械の価額（ドル）	2.07	0.83	1.04	1.44

注）1. ホームステッド届出面積を除く数値はすべて第12回，第13回合衆国センサスの資料からレーニンが編成した統計表により，又は文中に引用した統計値にもとづいて作成した。

2. レーニンが「半奴隷的な現物小作農」と呼んだ南部のクロッパー（croppers）は分益小作（share tenants）のなかに含められている。

南部に特有なクロッパー制と，収穫物又は畜産物の分益形態で土地を借りている北部や西部の大規模な借地農場とは本質的に異なることに注意する必要がある。

3. ⑦は1910年の農場総面積に対する1901～1910の10年間のホームステッド届出面積の割合である。

このホームステッド届出面積（Source : General Land office, Dept. of the Interior）は Statistical Abstract of the U. S. (1911) p. 28 から集計したものである。

これははじめに出される届出面積であって最終的に占取されたものではない。上記統計は Final Entries については合衆国総計のみが示されており州別になっていない。

ホームステッド法には種々の欠陥があったため，その多くは投機業者の手に渡るか，または抵当流れによって土地抵当会社の手に移ってしまったと言われている。したがって，現実耕作者の手えの土地分配という点からみて，その過大評価はげんにつつしまねばならない(1)。

レーニンは「たとえ，ここにあげた資料が絶対値としては過大になっているとしても，ともかく，この資料は，各地方間の関係を正確に描き出している」(10)と言って，これを地方の特徴づけの指標にとっている。

所有の一部が商業的小農場に移行するという動きも進行し複雑で多様な局面が交錯してあらわれていた。

レーニンはこれらの事実をまえにして「これらの関係の多様性はいちじるしいものであり、過去をも、未来をも、ヨーロッパをもロシアをもふくんでいる」（一〇九）と述べた。

レーニンは地域的区分にあたり、センサスにおける区分（一九〇〇年には五地方区分、一九一〇年には九地方区分）を原則的に承認したうえで、資本主義が農業に滲透する形態と段階とに応じて「本質的に別種の主要な地方」として、北部（ニュー・イングランド、大西洋岸中部、中部北東、中部北西の諸州）、南部（大西洋岸南部、中部南東、中部南西の諸州）、西部（山岳、太平洋岸の諸州）の三つの主要な地方に総括する。

そして資本主義が農業に滲透する形態と段階を反映する基本的な指標を主としてセンサス材料から選び出し、これによってそれぞれの地方を特徴づけて「この三つの主要な地方の差異のなかでもっとも基本的なものを規定するために、われわれは、それらを工業的な北部、かつての奴隷制的な南部および植民されつつある西部と呼ぶことができる」（八、傍点原文）としている。

レーニンが三大地方の特徴づけのために選びだした諸指標を一覧表にまとめて示せば〔第四表〕のとおりである。

注　ア・エス・リプキントはレーニンによって利用された三大地方を特徴づける指標の体系をつぎのように整理している。(2)

1　工業発達水準の指標
- 工業生産額
- 工業労働者数
- 農業生産額と工業生産額との相対関係
- 都市人口のパーセント

2　自由な土地の開拓度合の指標

・農場数の増加
・人口の増加とくに農業人口の増加
・土地総面積のうち耕地のパーセント

3　農業の集約化の水準の指標
・農作物群別の農業生産額構成（総生産額に対するパーセント）
・播種面積の構成（集約的農作物の割合）
・耕地一エーカーあたり家畜数・農具と機械価額・肥料支出
・土地一エーカーあたり農業用財産（土地・建物・農具と機械・家畜）、雇用労働支出

4　生産規模の指標
・一農場あたり土地面積、耕地面積、農具と機械価額
・一農場あたり乳牛頭数
・一農場あたり総生産価額

5　農業における資本主義発達水準の指標
・小作農のパーセント
・現物小作農のパーセント
・労働者を雇用した農場のパーセント
・労働者を雇用した農場あたりの雇用労働支出
・雇われて働いた農業者のパーセント

ここでレーニンが選び出した指標にもとづいて各地方の特徴をさらに要約的に述べておけばつぎのようである。北部では工業が農業に優越している。しかしなお農業生産物の主要な産地である。北部のうち、もっとも工業的な東北部（ニュー・イングランドと大西洋岸中部の二地方）はアメリカにおける資本主

義と大工業の発祥地である。ここでは工業の発展が農業のための市場をつくりだし、より小さな土地面積のうえに組織される集約的農業の原因となっている。そして農業がもっとも集約的かつ、もっとも資本主義的性格をもっている点で他の地方をぬきんでている。

南部ではかつての奴隷制の遺制が今日に至るまで非常に強力である。これは半奴隷的な現物小作制度(クロッパー制)を基礎にしている。

これが資本主義の基礎の拡大を阻んでいる。しかし一方、奴隷制的巨大土地所有から商業的小農場への移行が進んでおり、これが農場の平均面積の減少となってあらわれている。

西部は全面的にホームステッドの地方であり、地代から自由な新しい土地を基礎に農業の資本主義的発展がすすんでいる。しかしここでも旧来の土地面積に投下される資本額の増大による農業の発展がしだいに主要な進路となりつつある。とくに太平洋岸での資本主義的「小規模」栽培の果樹園の著しい発展が示すように、ここでも「経営土地面積が減小していながら大規模な資本主義的な農業が成長している」(三七、傍点原文)。

レーニンはこのような合衆国の三大地方の基本的な諸特徴の総括のうえに立って、これらの「地方的特殊性」=各地方に特有な農業進化の条件を考慮するならば、農場の平均面積の減小を示す資料にもとづいてギンメルがひきだした結論――「資本主義的大規模農業が分解せず、それが勤労的農業によって駆逐されていないような地方はない」(六)は一体どうなるのかをさらに追求してゆくのである。

ここでレーニンは、農場の平均規模の減小という「新しい現象」を示す資料の理解の課題を一そう明確にするため、農場の平均規模が小さくなった地方として南部と北部の一部(東北部すなわちニュー・イングランドと大西洋岸中部)とをとくにとりだしている。

そしてそこでの地方的特殊性を資本主義的進化の一般的命題の上向展開による結論の基本的側面と結びつけて、それぞれの地方の具体的歴史的現実にたいして説明を与えているのである。まず南部からみよう。

南部では、一九〇〇年から一九一〇年にかけて、自分の土地全部の完全な所有者である農業者（full owners）の数は一二三万七千人から一三二万九千人に、すなわち七・五％増加したが、他方、分益小作農民（share tenants）の数は七七万二千人から一〇二万一千人に、すなわち三二・二％増加した（1910 Census, Vol. V, p. 115）。

この資料にもとづいてレーニンは「南部におけるきのうまでの奴隷所有者たちは……漸次この土地を黒人に売りわたすようになっており、それよりも多くのばあいに彼らに小さな地所を分益小作として引きわたすようになっていると」（二一）述べている。

そして分益小作農民の大幅な増加は奴隷制プランテーションのクロッパー制プランテーションへの編成替を示しており、自作小農場の増加はプランテーションの一部の分割による奴隷制的巨大土地所有から商業的小農場への移行をあらわしているものとみている。

これらの過程が併行して進んでいたのである。レーニンはこのクロッパー制について「資本は半世紀まえに奴隷制を打破したがそれは今日それを更新された形態で、すなわち現物小作農制の形で復活させるためだったのである」（九一）と述べ、クロッパーを「半奴隷的な現物小作農」（一五）と特徴づけている。

注　アメリカの農業センサスにおいてクロッパー（croppers）を分益小作（share tenants）の内訳として特別に区分するようになるのは一九二〇年のセンサスからである。したがってレーニンが利用したセンサス資料ではクロッパーは分益小作のなかに含められていた。だが一九二〇年センサスによれば、南部では分益小作のうちクロッパーの比率が四六％を占めるところからしても、一九〇〇年から一九一〇年にかけての分益小作の増加はクロッパーの増加を大きく反映したものとみてまちがいない（1920 Census, Vol. V, p. 127）

小作（tenants）の分類は一九〇〇年センサスでは金納（cash）と分益（share）に二分されていたにすぎなかったが一九一〇年に金納、分益＝金納（share-cash）、分益となり、さらに一九二〇年に分益のうちクロッパーが「役畜をもたない（したがって地主の提供を受ける）現物分益小作」として特別に区分されるようになったのである（1920 Census, op. cit., p. 16）

しかしクロッパーを特別に区分した取扱いをしていたのも一九五九年センサスまでであって、六四年センサス以降クロッパーは再び分益のなかに包含されてしまっている。クロッパーを別掲しなくなったのは、「その数と重要性が減退したため」とされている。クロッパーは一九三〇年の七七六千をピークにして五九年には一二一千まで減少している。（1964 Census, Vol. II, Chap. 8, pp. 750—751）

ところでクロッパーの農場は「従来どおり〈主人〉のために、彼の監視のもとで働く黒人現物小作農の地所」（二〇）であって、プランテーション経営の実質的一部をなしていたのである。

注　センサスでは、これらクロッパーの農場も、それぞれ独立の「経営単位」をなすものとして調査集計されている。したがってクロッパー制への再編が進行するにつれて農場数が急増し、したがって農場の平均規模は減小してあらわれるという問題を含んでいた。

F・A・シャノンはこの点について次のように述べている。

「一八六五年から一九〇〇年にかけて、小作およびシェア・クロッピングがおどろくほどふえたが、それぞれの奴隷の holding は農場の数に算入された。

プランテーションは、そのようなものとしては解体しなかったという事実とともに、農場の平均規模の減少も総数の増加もともに、おおくはセンサス報告の不十分さにより説明される。センサスはシェアクロッパーの小地面がより大きな所有権の一部をなしたことを知らせなかった。

さらに、一人の人間が多数のプランテーションを所有する場合、いちじるしく大きな全エーカー数の一部分としてではなく、それぞれが個々別々の単位としてリストされた」[3]

レーニンは、奴隷制プランテーションのクロッパー制プランテーションへの編成替と錯綜してあらわれているも

う一つの動き、すなわち奴隷制的巨大土地所有の一部が分割され自作小農場が増加するという動きに注目している。

そしてこれは「勤労的」農業への移行ではなく綿花生産を主とする商業的小農場への移行を意味しており商業的農業の成長にほかならないとしている。

加えて「それぞれの国やそれぞれの地方の具体的資料をとくに検討することなしに、巨大土地所有を資本主義的な経営である」(二一、傍点原文)とし、それの細分化を「資本主義の分解」と呼ぶことがいかに根拠のないものであるかをくりかえし批判している。

さらにまた南部の主要地方をなす「大西洋岸南部」では「作付面積が減少しながら経営規模は大きくなり賃労働の利用が増大する」(二三)ような集約的な経営(タバコ、野菜、果実)の生産が発展していることを指摘している。

このようにレーニンは南部での農場平均面積の減少を、一般的命題の上向展開の結論と地方的特殊条件とを結びつけることによって説明を与えている。

さらに、東北部での農場平均面積の減少はどのように説明されているであろうか。

レーニンは北部のうちのもっとも工業的なそして農業がもっとも集約的な東北部地方に注目している。この地方は「農場の平均規模がとくに小さいこととこの規模が減少しつつあることによってギンメル氏その他多くのものをまよわせている」(五五)地方である。

すなわちギンメルは「より古い文化をもち経済的発展のより高い地方」では「生産は細分され零細化しつつある」としているからである。

まずレーニンはこれらの地方での農場の平均規模の減少は「西部の自由な(地代から自由な、土地所有者諸君への貢

納から自由な）土地の競争の影響によるものであろう」（四〇）という指摘をしている。

周知のいわゆる「一九世紀末農業恐慌」はヨーロッパの農業に深刻な打撃を与えただけでなく、古くから開拓され地代の重荷を背負っていたアメリカ東部諸州にも大きな影響をおよぼしたことは明らかであった。

注　たとえばリュボシッツは新たに植民された地方の競争によって生じたアメリカ東部諸州における農業恐慌について次のように述べている。

「一九世紀末の農業恐慌は、ヨーロッパ農業のほか、アメリカのもっとも工業的な、古くから開かれてたい東部諸州（ニュー・イングランド地方、中部大西洋諸州）にも強力な影響を及ぼした。アメリカの東部諸州にはすでに土地私有が確立されており、この土地私有がヨーロッパにおけると同様に、地代の重圧をうける農業の発達行路にその刻印を押したのであった」[4]「アメリカ東部諸州の農業恐慌は、その尖鋭さにおいても力においても、イギリスの農業恐慌に劣らなかった」[5]

「ヨーロッパ農業を競争不能におとしいれたのと同じ原因がアメリカ東部諸州の農業を競争不能にしたのであった。……地代を課される土地は圧迫され、地代なき土地の競争の攻勢によって退却させられたのであった」[6]

これらの経過は、ひきつづく西部農業の発展と輸送手段の完成のなかで東北部の農業に大きな変化を迫ったのである。

東北部の農業は穀物、食肉用家畜から都市市場むけの酪農、野菜、果実などより小さな土地面積のうえに組織される集約的農業への転換をすすめた。[7]

この経営組織の転換がより小さな土地面積のうえに組織されることになるのは「農業におけるいまの資本蓄積」と「いまの技術」の条件のもとでは必然的なことであった。

そしてこの転換は同時にまた、この地域での工業における資本主義の高度な発展が「農業のための市場をつくりだし、その集約化の原因」（一二）となるという条件によっても促進されていたのである。

〔第5表〕　地方別にみた経営の集約性と資本主義的性格の指標（1910）

		北部				南部			西部		合衆国
		東北部		中西部							
		ニュー・イングランド	大西洋岸中部	中部北東	中部北西	大西洋岸南部	中部南東	中部南西	山岳部	太平洋岸	全体
1農場あたりの平均耕地面積（エーカー）		38.4	62.6	79.2	148.0	43.6	42.2	61.8	86.8	116.1	75.2
1エーカーあたり平均収量	とうもろこし（ブッシェル）	45.2	32.2	38.6	27.7	15.8	18.6	15.7	15.8	24.0	25.9
	小麦（〃）	23.5	18.6	17.2	14.8	11.9	11.7	11.0	23.1	17.7	15.4
乳牛	1農場あたり平均乳牛頭数（頭）	5.8	6.1	4.0	4.9	2.1	1.9	3.1	4.7	5.1	3.8
	1頭あたり平均乳生産量（ガロン）	476	490	410	325	286	288	232	339	475	362
肥料	肥料を購入している農場（%）	60.9	57.1	19.6	2.1	69.2	33.8	6.4	1.3	6.4	28.7
	上の1農場あたり平均支出（ドル）	82	68	37	41	77	37	53	67	189	63
	耕地1エーカーあたり平均支出（〃）	1.30	0.62	0.09	0.01	1.23	0.29	0.06	0.01	0.10	0.24
農具と機械の価額	1農場あたり平均価額（〃）	269	358	239	332	72	88	127	269	350	199
	土地1エーカーあたり平均価額（〃）	2.58	3.88	2.28	1.59	0.71	0.92	0.95	0.83	1.29	1.44
雇用労働	労働者を雇用する農場（%）	66.0	65.8	52.7	51.0	42.0	31.6	35.6	46.8	58.0	45.9
	上の1農場あたり平均支出（ドル）	277	253	199	240	142	107	178	547	694	223
	耕地1エーカーあたり支出（〃）	4.76	2.66	1.33	0.83	1.37	0.80	1.03	2.95	3.47	1.36
	1899－1909年の同上支出増加率（%）	86	62	71	48	71	63	37	22	80	58

注）第13回合衆国センサスの資料からレーニンが編成した統計表にもとづいて作成した。

かくてレーニンは、農場の平均規模の減少がみられる東北部の農業が北部のその他の地方（中部北東および中部北西）および南部そして西部とくらべて、農業技術の点で、また農業の集約性と資本主義的性格の点ではるかに進んでおり、根本的な相異をもっていることを統計指標の体系をもって描き出している。これを整理して一覧表で示せば〔第五表〕のとおりである。

このようにレーニンは東北部での農場平均面積の減少を、一般的命題の上向展開の結論と地方的特殊条件とを結びつけることによって説明を与えている。

およそ以上にみてきたような筋道をとってレーニンは、アメリカ農業における農場の平均面積の減少を示す統計資料をもとにして「資本主義的農業は崩壊しつつあり、生産は細分され零細化しつつある」（五）という結論をひきだす修正派の主張にたいして、資本主義のもとでの農業進化の一般的命題を事実と統計資料との対置をとおして実証的に展開しつつ二〇世紀初頭の「アメリカの農業とその進化の全貌を全体としてしめ」（八二、傍点原文）し「農業進化の形態と法則」をつかみだすという歴史的にして論理的な実証的経済研究の体系をもってこたえ、これを論破しているのである。

またこのような理論の実証的展開において「社会を認識するためのもっとも強力な道具の一つ」[8]としての統計の利用に不可欠の位置と役割を与えていることも明らかであろう。

（1）ホームステッド法の種々の欠陥についてはF・A・シャノンの明解な指摘がある。
Fred A. Shannon, The Farmer's Last Frontier: Agriculture, 1860—1897 (Vol. V, The Economic History of the U.S.), 1945, pp. 53—58.

（2）А. С. Либкинд, Анализ Американских сельскохозяйственных чснзов в работах В. И. Ленина, 1967, стр.

10～11.

（3）Shannon, op. cit., p. 81.

（4）リュボシッツ「農業恐慌理論の諸問題」一九四九年、農業理論研究会訳、一四三頁

（5）同書一四六頁

（6）同書一四七頁

（7）Shannon, op. cit., pp. 246—261. を参照

（8）レーニン「現代農業の資本主義的構造」『全集』第一六巻、邦訳四五三頁